

語り合う文学教育の会

2012年度No.7

12月22日 文責・橋本博孝

「海の命」

6月三重例会での草分さんの実践報告と2010年の小椋さんの実践をふりかえります。

光村の教科書を使っている6年生担任の方は、3学期に「海の命」を実践されることになると思います。東京書籍地域の先生はもう終わられたでしょうね。草分さんと小椋さんの実践からたくさん学びましょう。

草分さんは、「海の命」にとりくむ頃の学級が、何かあわただしく、子どもとの関係もしっくりいってないように感じていました。そこで、

やっぱり文学しかない。ゆったりとした教室を生み出すために、みんなが自分の思いを出し合って、ほっと笑い合えるような時間を取り戻そう、「海の命」をしっかりやろうと思った。

と考えられました。

「海の命」はよく分からないところがある。でも、子どもたちはどう読むのだろうかと思うと、みんなと一緒に楽しもうという気持ちになる、と次のように言います。

(子どもたちは)6年間の中で本当にいろんなことがあり、友だち関係で悩んだこともあった。でも、みんな「対等」でいられる国語の時間を結構好きでいてくれる。まず、「思ったことを言えばいいんだ」と感じてくれている。友達の見解に「なるほど」「へえ～」と思い、その子の良さを発見できる。みんなが意見を言う中で、まだ何も言っていない子がいたりすると、その子のことを気遣ってくれる。

笑ったり、拍手したり、そんな雰囲気は私も好きだ。

いつも思うことですが、草分さんの実践力は、このような授業を子どもたちと本当につくりあげてしまうところにあります。願うだけならわたしもいつも願っていたのです

が…。

紹介するのは、とりくみを始めてしばらくの頃。与吉じいさに弟子入りするところの授業です。

先生・与吉じいさと太一の関係は？

しゆ・太一は、漁のことを教えてもらうのは、父の次は与吉じいさしかいないと思って、弟子になったと思います。漁をお父さんに教えてもらおうと思ってたんだけど、死んでしまったので、もう与吉じいさしかいないと思っていたと思います。

こだ・与吉じいさは、太一の父のように、父が死んだ瀬に毎日行って一本釣りをしている漁師さんなので、父に似ていると思って、与吉じいさを師匠にして弟子入りしたと思います。

たけ・太一は漁がしたくて、中学を卒業する夏で、まだ卒業もしてないのに、与吉じいさに漁を教えてもらいに行ったんだと思います。

先生・まだ卒業もしていないのにね。

さゆ・太一は父と一緒に漁をしたかったのに、その父を殺したクエをしとめたいと思ったから、与吉じいさに弟子入りしたと思います。

ゆう・わたしもさゆさんと一緒に、尊敬していた父をやぶったクエを自分でやっつけようと思って、与吉じいさに漁を教えてくれと頼みに行ったと思います。

子どもたちは、太一が与吉じいさに弟子入りしようとした動機を、父の死んだ瀬で漁をしていることに見ています。それは、父をやぶったクエをしとめたいと思っていたからだとしています。与吉じいさの漁師としての腕前は自明のことだったのでしょ。ゆうさんの後も、同じ立場での発言が続きます。

ここで、太一は与吉じいさの哲学「千匹に一匹でいい」を知っていたのでしょうか。わたし(橋本)は、それを知って弟子入りしたとは思えないのですが、子どもたちはどう読んだでしょう。

授業を追っていきます。

先生・太一は与吉じいさを選んで頼みにいったんだけど、与吉じいさはどうしたの。引き受けたの。「いいよ」って言ったの？

さき・私は、与吉じいさは太一の頼みを断ったと思います。理由は「もう魚を自由に遊ばせてやりたくなっとる」と言っているから、魚をとるのが漁師の仕事やのに、魚を海に遊ばせてやる、というのは、魚をとりたくないってことだから、太一の弟子入りを断ったと思います。

りよ・与吉じいさは今までさんざん魚をとってきたし、しかも「わしの年じゃ」って書いてあって、もう漁をするのがえらくなってきたから、断ったんだと思います。

まお・与吉じいさは、多分毎日ずっと魚をとってきたから、もう魚を自由に遊ばせてやりたいと思っていて、たとえ太一を弟子にしてももう教えてあげられないと思って断ったんだと思います。それで、もう年だからほかをあたってみてください、みたいなことを言ったんだと思います。

ゆう・太一は「無理やり弟子になった」と書いてあるから、太一も断られたとわかっているのに、無理やり与吉じいさの弟子になったんだと思います。

先生・なるほどね。

さゆ・与吉じいさは、若いころはたくさん魚をとっていただろうけど、もう年だし、動きもぶくなっているだろうし、いま弟子入りされても教えることができないと思って断っています。

与吉じいさと太一とのやりとりは、

「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に自然に遊ばせてやりたくなっとる。」

「年を取ったのなら、ぼくをつえの代わりに使ってくれ。」

こうして太一は、無理やり与吉じいさの弟子になったのだ。

となっています。与吉じいさは、表面的には、断るとも引き受けるとも言っていません。太一の返事も、弟子入りを再度頼む内容ではありません。が、そのあたりの暗黙の了解を子どもたちはしっかり感じとっています。

また、ここは、与吉じいさの哲学「千匹に一匹でいい」が、どのように形づくられてきたのか、考えられるところでもあります。さゆさんの発言でよく分かるように、子どもたちは年寄ってそういう思いに達した、若いころはたくさんとっていたと読んでいるようです。事実はどうだったのかわかりませんが。

では、太一は与吉という老漁師の哲学に出会って、どうなったのでしょうか。

草分さんはそこに子どもたちの考えを向けようとします。ところが、実際の授業では

思わぬ展開が起こります。思いついたことをどンドン発言しているようなので、子どもの名前は特定されていません。

先生・年やから、確かに動きもにぶくなっているだろうね。じゃあ、与吉じいさはなぜ太一が自分のところへ弟子入りしに来たのか、知っていたかなあ。太一は理由があって、無理やり弟子入りを頼んだんだよね。

子ども・先生、与吉じいさって、太一のお父さんやろ？

先生・え？

子ども・与吉じいさと太一の父は、親子？

子ども・与吉じいさの孫が太一じゃないの。

子ども・ちがうやろ。

先生・ああ、そう思ってたんや。

子ども・わざわざ無理やり頼みに行ったんやで。

子ども・まあ、他人やろ。

子ども・与吉じいさの子どもが太一の父で、その子どもが太一かと思っとった。

先生・じゃあ、太一は自分のおじいさんやで、弟子入りしに行ったん？

子ども・ちがう。

子ども・父が死んだ瀬に行っている漁師やから。

子ども・漁がうまいから。

先生・与吉じいさは、自分がおじいさんやから太一が頼みに来たと思ってたの？

子ども・そんなことはない。

子ども・自分を選んできたのは、漁師になって父のかたきを討ちたいからと知ってたと思う。

子ども・復讐するつもりやって分かった。

先生・ふんふん。太一は父の復讐をするつもりで自分を頼ってきたんだなって、分かってたかもしれないね。

子ども・それもあって断っているんや。

子ども・太一に復讐を望んでいない。

— このあたりで、ふつうの状態にもどったようです —

りよ・太一に生きていてほしいから、復讐でクエをねらったら太一が死んでしまうかもしれないから、だからそうなってほしくなくて、断ったんだと思います。

たな・無理やりとらなくても、魚を自由に遊ばせてやってほしい。

先生・与吉じいさはいろんな理由で太一の弟子入りを断っているのに、でも、太一は無
理やり弟子になったね。弟子になって、与吉じいさにどんなことを教えてもらいま
したか？

ここでいわゆる「正統的周辺参加論」みたいな話になります。でも、違う意見にも出
会いました。別の学校での授業ですが、指導案にはこう書かれていました。

「一本釣り」を行う「飼いつけ漁」では、釣り針に餌を付けるのが一番重要な仕事であることを
補足説明する。「なかなか釣り糸をにぎらせてもらえなかった」のは、太一を一人前の漁師に
してやりたいという与吉じいさの思いであったことに気付かせ、次時につなげる。

実際にはどうなのでしょう、漁師さんに聞かなければわかりませんが、この物語の
中では直接にはそのことは語られていません。

草分さんの授業にもどります。

けい・ぼくは、多分、与吉じいさは「千匹に一匹でいいんだ、千匹いるうち一匹を釣れ
ば、ずっとこの海で生きていけるよ」ということを教えたかったんだと思います。

それは、海の恵みを大切にしろってこと、魚を食べずに、

子ども・食べやなあかんやろ。(笑い)

けい・そうや、言い直し。あまり必要以上にとったらあかんってこと。

りひ・ぼくもけいさんと一緒に、「千匹いるうち一匹を釣れば、ずっとこの海で生きて
いけるよ」ってことは、やたらとるんじゃなくて、海の恵みを大切に受け止めてほ
しいと思って、それを教えたかったんだと思います。

— ちょっとはしよります。ごめんなさい —

先生・「千匹に一匹」とか「とりつくさないで」って教えたかったんだけど、「千匹に一
匹」という言葉だけで終わってないよね。それに続いて、与吉じいさは、何か言っ
てるね。

子ども・「ずっとこの海で生きていけるよ。」

子ども・生きて行ってほしい！ってことや。

子ども・こっちがほんとに言いたかったことや。

ゆい・与吉じいさは、太一にこの海で生きていってほしかったから、そのためにどうしたらいいか教えたかったんだと思います。だから、太一に「生きていってほしい」って言いたかった。

先生・ゆいさんの意見、どうですか。

子ども・いいなあ。

子ども・だから、与吉じいさの言いたいのは、「生きていける」ってことや。

子ども・太一に海で生きること。

先生・そうやねえ。与吉じいさは太一に海で生きることを教えたかったんやね。

思いちがいてもふくめて、いろんな読みを出し合って、それぞれの考えを聞き合い、受け止めあっている様子が伝わってきます。この授業は、全体で言うと4時間目、場面の読みでは2時間目ですが、草分さんの願っていたように、語り合う授業を通して先生と子どもも、子ども相互もつながりあっていきつつあることが感じられます。

1年間の成果、この学級は持ち上がりだったとのことですから、2年間の積み重ねの大きな成果ですね。

「海の命」という物語について言えば、草分さんはここで父の仇討をしようとはやる太一の思いを見透かして、漁師の生き方を説こうとしている与吉じいさを見えています。この授業の後のさゆさんのノートには、こう書かれています。

よくばりばかりせず、千匹に一匹をとるほど魚を殺さず、千匹に一匹だけでいい、海のおかげなのだから、無理せず、千匹に一匹で生きていけるから、無理せず生きていけ、父のように死ぬな。魚をたくさんとることよりも生きることを先に考えてほしかったんだと思います。父のように死んでほしくなかったんだと思います。

太一は、そこで与吉じいさの言いたかったことがちゃんとわかったのかな？と思いました。

「生きることを考えろ」と言いたかったけど、違う言い方にして伝えたんだと思います。

この後、草分さんの授業は、太一の中に生まれる、与吉じいさの教えと父のかたきをしとめたい思いとの葛藤を一つの軸に展開されていきます。草分さんの授業記録を読むと、納得できる読みのように思えますが、わたし(橋本)にはまだこの物語の骨格がとらえきれないのです。考え続けなければならない教材の一つです。みなさんの考えも聞か

せてください。

小椋光裕さんの実践は、2010年の12月例会のレポートです。今までお蔵入りにしてしまっていました。申し訳ありません。

小椋さんはこの時期の子どもたちに、自分の意見をしっかり持ち、伝えること、聞き合うことを願っていました。そのために、2人や4人での話し合いもとりにれています。「海の命」という作品については、次のようにとらえています。

「海の命」とは、海に関係した人間や生き物の「命」のことである。与吉いさ・太一・父・母、といった人間だけでなく、大魚・小魚といった海の生き物も「海によって生かされる一つひとつの命」であり、「海の命」である。もう一つ、漁師が「千匹に一匹しかとらない」漁を守り、海によって生かされている大魚・小魚などの一つひとつの「命」すべてがバランスよく食物連鎖の関係でつながりあって海をつくっているのも「海(全体)の命」である。「海の命」は多くの「命」によって、生かされてつながっている。

「千匹に一匹」の漁をし続けることで、代々この村では「命」をつなげてきた。太一は、この海に生きる人たちのつながりの中で生まれ、「命」が太一に引き継がれた。そんな太一も、父・与吉いさが「海に帰った」ように、いずれ海に帰っていく。そして、太一の子どもたちは、太一から受け継いだ「命」を自分なりに受け止めて、さらに「命」を自分の子どもたちへつないでいく。「海の命」は、時間を超えて、過去から未来へとつながる「命」でもある。

小椋さんの教材の見方は、海の命を、食物連鎖を通してすべての生命に広げていることと、世代を超えた永続性を見ていることとに特徴があります。これもこの「海の命」という物語の、一つの有力なとらえだと思います。小椋さんの主張は、明確です。

この見方の課題は、小椋さんも「代々この村では…」と書いているとおり、少年太一が村の一員となっていく、いわば成人への通過の試練という要素が強くなることだと思います。太一は「村一番の漁師」と与吉いさに言われ、最後には語り手も太一をそう呼んでいます(父は「村一番のもぐり漁師」と太一に回想されています)。その太一の個性(「村一番」の意味)、他の漁師との違いが薄くなるのではないかと感じます。全体として他の漁師像は語られていないので、当然と言えば当然なのでしょうが。

小椋さんの授業を見ていきましょう。こちらにも、草分学級に負けず劣らず、一人ひとりが自分の読みを語っています。

6 時間目、太一がクエと対峙し、「殺さないで済んだ」ところの後半です。

先生・瀬の主はクエやよな。「海の命」というのは、誰なん？ 何なん？ 二つの文、書くよ。

大魚は海の命	大魚が海の命
--------	--------

「は」と「が」、違うよね。この違い何やろ、どんな感じする？

たけ・「が」 やったら確定っていう感じするけど、「は」 やったら確定されていない。

とう・「は」 やったら複数。

たく・とう君と同じで、「は」 の場合は複数。ほかにも、海にも、同じに見える魚がお
って、「が」 やったら、そこにクエ、瀬の主だけ。

なな・「が」 だけやったら大魚だけ。

けい・とうさんとたくさんと同じで複数、「は」 から、複数おる。

先生・教科書の文は「大魚はこの海の命だと思えた」と書いてあります。海の命は、大
魚と、ほか何があるの？ 大魚以外、何がある？

たく・魚をとる漁師。

まさ・魚をとる漁師と他の魚。

ほな・この大魚が、小さい、食べるえさとなる魚がおって、この魚が生きとるわけやか
ら、えさとなる魚とか全部。

たけ・えさとなる魚が食べるプランクトン。

先生・「海の命」 っていうのは、大魚以外にも、ここに住んどの漁師やほかの魚、えさ
となる魚やプランクトン、海における全部やな。

さあ、最後です。「大魚はこの海の命だと思えた」ところから、みんなはどんな
ことを思いましたか？ 言える人、手を挙げてください。

けい・大魚だけではない海の命っていうのは、海にとって大切なもの。

たけ・大魚がいることでこの海が守られていることは、大魚がいることで海の命が守ら
れている。

先生・海が守られとる。

なな・海を守っている。

先生・大魚は海を守っている。

ほな・いっしょで、大魚は、ということは、「大魚は海の命」 やで、大魚の食べる魚も
おってなりたつとるから、いろんな小さい魚とか、いろんな生物おる。

ゆき・大魚も入れて、海全体の生物がおる。

先生・さっき、ほなさんが言ってくれたこととよく似てるんやけど、この大魚は海全体の生き物とも置き換えられます。海全体の生き物は、すべて海の命であって、そして、海全体の生き物の中で一番強いクエも、海全体を代表する海の命なんです。

もし、こんな強いクエを、太一がもりでうってたら、海はどうなる、あいちゃん。
あい・海の命が少しけずられる。

たく・大魚を殺すと、海のバランスがくずれて、海が生きていけやんようになる。

ほな・いろんな魚とかがおって海なんやで、一つでも減ったらくずれる感じ。

先生・くずれる。それが与吉じいさの教えやっせん。それをわかったから、太一はこのクエを殺さなかってん。

食物連鎖は具体的で子どもたちにもわかりやすい考え方だと思いました。小椋さんがめざそうとしたのは、単に食物連鎖という関係だけではなく、もっと大きな生き物相互のつながりのような気もしますが、授業では、この海の食物連鎖の頂点にいるクエという読みになっています。

次の授業では、太一の子どもたちのこととクエとの対峙を生涯誰にも言わなかったことについて語り合っています。

ここで、ななさんが「瀬の主と会ったとき、父だと思ったから（そのクエを危険にさらさないため秘密にした）」と言っています。

瀬の主に父を見た、ということにこだわって読んでいけば、小椋さんのもう一つのぬらいであった、世代を超えて受け継がれる海の命、というとらえがでてきたかもしれません。

生き物同士のいのちのつながり、それが世代を超えて受け継がれる。この二つを合わせると「輪廻」という考え方にもたどり着けそうです。これは、小椋さんの実践が示した新たな方向ではないかと思います。

二つの特徴ある実践を見てきました。

わたし（橋本）は、これは海の英雄伝説を語っているように思ってきました。

太一の生涯はまさに英雄の伝記です。幼くして父を失い、知恵と経験のある老人に導かれ成長し、母の悲しみをも背負い、そして、ついに宿命のクエと巡り合い、父の死の謎を解きます、その瞬間、太一は英雄となります。伝説の王が王国に永遠の平安をもたらしたように、英雄太一は、海と家族に永遠の平安をもたらします。英雄伝説の型を全

部備えているように思います。

英雄だから、太一の内面はほとんど語られることはないのです。父の死を悲しんだり、かたきを討とうなどと思うことのない存在として位置づけられているのではないのでしょうか。

そうすると、最後の「もちろん太一は生涯だれにも話さなかった」が、わたしには奇妙に聞こえます。そんなことは人間のすること、英雄ははじめから話すことなどありえない。英雄として語りきっていないことになるのではないかと感じたのです。

授業の要は、父の死の謎とはなんだったか、謎を解いた太一のほほえみの意味は何か、ということになります。

草分さんの実践が示している、与吉じいさの哲学の背後にある「生きろ」というメッセージ。小椋さんの実践が展望している「輪廻」という思想。これらを踏まえて、もっともって考えていきたいと思えます。

これから実践される皆さんはぜひ、先生と子どもたちの読みを教えてください。お願いします。

NO PASARAN !

教員を競わせることは、子どもたちを競わせること。

子どもたちを競わせることは、教室を荒地にすること。

教員をしばることは、子どもたちをしばること。

子どもたちをしばることは、国の未来を閉ざすこと。

わたしたちは、子どもたちと日本の明日のために、

日本維新の会の教育「改革」に反対します、

教育に民主主義を根づかせ、地域市民にひらかれた学校を創ります。

先日行われた第50回東海近畿教育サークル合同研究集会で採択されたアピールです。総選挙の結果、自民党の中でもかなり復古的で管理的な教育政策の担い手の一人である安部晋三が、再び首相になることになりました。思い返せば、彼の前回の政権下で教育基本法が改悪されたのでした。選挙中も、組合が今日の教育諸問題の元凶であるという意味の発言をくりかえしていました。

さらに警戒すべきは「維新」が一定の勢力を得たことです。石原慎太郎と橋下徹とい

う、東京と大阪で公教育を、理念の上でも、また実際の教育行政においても、ズタズタにしようとしてきた二人が代表者の政党です。自民党にすらできない教育「改革」を推し進めようとする勢力になることは間違いないでしょう。

考えなければならないのは、彼らを支持した国民の教育要求がどこにあったのか、どんなものだったのかということです。

わたし（橋本）は、教員ではない知人や友人から、それぞれの校区の学校に対する批判、教員に対する不満を何度か聞きました。もちろん教育行政の責任が根本的で大きいのですが、わたしたちがかえりみなければならない課題も確かにあると思いました。

見せるための行事に追われて、日々の授業が手薄になっていませんか。「規律」という名目で、授業に管理を持ちこんではいないでしょうか。となりの教室と、授業進度や内容だけでなく掲示物までそろえてしまっていないですか。「学力」調査問題用のドリルに時間を費やしていませんか。

くりかえし言いますが、教員個人が責めを負う課題ではありません。しかし、地域市民、保護者の教育への本当の願いは、そんなところにはないはずで、そのことに確信を持って、一人からでも少しずつでも、教育と学校を変えていきましょう。

子どもたちが人間的に自立する意志と力を持つこと、そのためにわたしたちはどのようなとなみをすればよいのか、これからも一緒に考えていきたいと思います。会員のみなさんの学級の様子を教えてください。

とりくみ・これまで

☆ 11月17日（土）奈良教育大学附属小学校教育研究会☆

たくさんの参加がありました。鈴木さんが「おぼえていろよ、大きな木」、菱井さんが「フレデリック」の授業をしました。

☆ 11月23日（祝日）24日（土）東海近畿教育サークル合同研究集会☆

23日の藤原先生の講座には、14名の参加がありました。24日の国語教育分科会は18名の参加でした。名古屋の中垣さんが「じどう車くらべ」を例に、一年生の国語の授業で大事にしていることの実践を報告しました。奈良の鈴木さんが、ひらがな指導から一年生にどんな力をつけようと思っているか発表しました。

☆ 12月22日（土）三重例会☆

福井さんの実践報告「たぬきの糸車」。18名の参加でした。忘年会もしました。

とりくみ・これから

★1月12日（土）奈良例会★

午後2時半から、奈良教育大学附属小学校です。

★1月26日（土）三重例会★

日下さんの実践報告。午後2時半から、三重大学教育学部4階国語教育演習室です。

★2月9日（土）三重大学教育学部附属小学校公開研究会★

国語の授業は、午前は、9時45分から「たぬきの糸車」（1年・駒田健志さん）と「わらぐつの中の神様」（5年・岡井崇さん）の二つの授業を並行して行います。午前中のもう一つの授業を見ていただいた後、11時50分から12時35分まで、授業についての検討協議をします。

午後は、2時30分から「スーホの白い馬」（2年・奥山能隆さん）と「ごんぎつね」（4年・奥知子さん）の授業をします。終了後、検討協議です。

今年から、わたし（橋本）と守田先生が共同研究者として、教材と授業を一緒に考えてきました。三重だけでなく、奈良県のみなさんもたくさん来てください。

3月2日（土）語り合う文学教育の会・総会と大会（詳しくは次号で）